



海援隊旗(二曳きの旗)

<http://www.ryoma-kinenkan.jp>

四海 SHIKAI KEITEI 兄弟

新年「選りすぐり 北川家寄贈資料」展

期間 平成24年1月14日(土)～3月31日(土)

北川家は、野根山23士の一人、新井竹次郎の実家に当たる。竹次郎は勤王の志篤く、中岡慎太郎も認める優秀な人物だった。23士の一人として、武市半平太の赦免を訴えて立ち上がったが、藩に捕らえられ処刑されてしまった。

当館は、平成13年から15年にかけて、北川太一郎氏に竹次郎関連の資料や国沢新九郎の貴重な絵画をご寄贈いただいている。今回その第二弾として、一昨年から数回に分けて80点ほどを



徳弘董斎画「亀図」

ご寄贈いただくこととなった。代表的な資料としては、勝海舟や西郷隆盛の書、河田小龍や徳弘董斎の画、藤本鉄石や池内大学の書画などがある。

幕末維新时期は、海外の文化が一気に流入する時代で、日本の文化もここを起点に大きく転換する。今回の寄贈資料には絵画が多数含まれており、当時の文化を知るには最適な資料であり、今後大いに活用していきたい。本展では、この中から30点ほどの資料を厳選して展示する。 三浦 夏樹

変化の時代へスタート
子ども目線を意識しよう
基本は「発信する龍馬館」

2012年は前進の年に迎えて辰年。大河ドラマ「龍馬伝」で沸いた一昨年から、昨年は東日本大震災と鳴動が収まる気配はありません。まさに世界は変化の時代です。揺れる世相は波乱の予感を感じさせます。坂本龍馬記念館は開館21年目に向けて新たなスタート

を切りました。不安定な時代だからこそ「龍馬」でしょう。視野を広げ、発信する龍馬記念館として特に今年「子ども目線」を意識しながら職員一同心を合わせて次なるステージを目指します。「志高く」です。よろしくお願いたします。 森 健志郎



シェイクハンド龍馬像の前で新年のごあいさつ 職員一同

募金に協力ありがとうございました。

【東北地方太平洋沖地震義援金】

今回の東北地方太平洋沖地震被災地支援の義援金にご協力頂き、ありがとうございました。お預かりした今回の義援金37万8044円は、岩手県復興局「いわての学び希望基金」に寄付させていただきました。

いわての学び希望基金 ホームページ
<http://www.pref.iwate.jp/view.rb?cd=33420>

今日はみんなあ龍馬ぜよ

■坂本龍馬記念館開館20周年記念イベント 2011年11月15日

開館20周年繰り上げ記念式典（13日）を受けて正規の20周年記念日でもあり坂本龍馬誕生日である15日、館は無料開館を実施、合わせて朗読リレー、かるた会、鎮魂と決意の手筒花火の打ち上げなど記念イベントを行なった。この日のテーマは「今日はみんなあ龍馬ぜよ」。当日は平日にもかかわらず、地元高知の龍馬ファンで賑わった。



朗読リレー（近江屋セットにて）

「近江屋」セットで朗読リレー
台本は「汗血千里駒」
「汗血千里駒」とは、坂崎紫瀾による坂本龍馬を題材にした史上初めての歴史小説で、明治16年（1883年）から土陽新聞に掲載された。今回は、当日飛び入りのお客様にも気軽に参加して頂けるように、現代語に訳された読みやすいものを使用。1冊の本を60の場面に分け、朗読リレーで繋いでいく。一人の力は小さいけれど、大勢の同志

予想外の2回戦も盛り上がったかるた会
朗読の休憩時間には、当館制作の人気商品「りょうまかるた」を使ってかるた大会を開催した。この「りょうまかるた」は、龍馬はもちろん、龍馬に関わる多くの人物や幕末の出来事も広く学べるように制作したもので、読み札裏面には詳しい解説付きとなっている。
第1回戦はお子様より大人の方が多い割合になったが、こちらの予想をはるかに上回る盛り上がりを見せた。そんな中、第1回戦参加者達の白熱した戦い

ファイナーレは手筒花火と維新太鼓
波音を伴奏に
20周年の締めくくりは桂浜龍馬像下の浜辺を舞台に、静岡県三ヶ日町手筒花火保存会の花火と高知の龍馬好きの昭和の有志が起こした維新太鼓の共演であった。東日本大震災への「鎮魂」と新しい年に向かう館の「決意」を表わすパフォーマンスである。
後で知ったのだが、県下での手筒花火は初めてのことだったという。火と人の「競演」が独特の雰囲気をもたらし出す。シューと吹き上げる火の粉「ズン」と響く破裂音。筒を抱える花火師たちは確実に火の粉の中にいる。「ドン、ドドン、ドン…」撥をかざして鬼が舞う。



見物客を魅了した手筒花火と維新太鼓（桂浜で）

決意新たに20周年式典 握手攻めシェイクハンド龍馬像

— 構想から1年あまり、光に包まれたりりしい姿 —

11月13日。朝から曇一つない快晴であった。高知県立坂本龍馬記念館は開館20周年記念式典の日を迎えた。式典は記念館東隣の桂浜で行なわれた。皮切りは土佐民俗芸能継承者である黄之瀬洋子氏の土佐木遣り唄「龍馬、慎太郎」。高知県教育長中澤卓史氏を始め坂本家9代坂本登さん、龍馬の手紙朗読・コンサートで乙女役をお願いしている女優の小林綾子さんらの祝辞が続く。その後は（徳川宗家第18代の子息である）徳川家広氏を迎えての記念講演「関ヶ原から龍馬を見る」、最後はシェイクハンド龍馬像の除幕式で大いに盛り上がった。



待ちに待ったシェイクハンド龍馬像との握手

手をつないで一つになろう！
握手ができ、触れることができるという今までにない龍馬像設置の案が出てから1年あまりになる。遂にその姿を見ることができるようになる。除幕式は出席する子ども達を含め、制作者の先生方もまた式典に出席された多くの方々が見守る中、行われた。まぶしい陽が照りつける青空の下、維新太鼓の音が響く。合図と共にシェイクハンド龍馬像が姿を現した。



木遣りを唄う黄之瀬さん

光に包まれたりりしい姿に拍手が鳴り止まない。子ども達の顔から笑みがこぼれる。最初に握手を託される子ども達に館長の言葉が続く。「誰が最初に握手をするのか前日まで悩みを悩んだ。シェイクハンド龍馬像へ手紙を書いてくれた子ども達、そして会場にいるみなさん全員で輪になり心一つにして握手をしよう！龍馬もさつとそうするはず。」自然と人が繋がっていく。維新太鼓に合わせシェイクハンド龍馬像が差し出す右



シェイクハンド龍馬像、除幕！

300人の熱い想い ～「龍馬さんへのラブレター」発売～

拝啓龍馬殿の書籍第2弾は、「龍馬さんへのラブレター」すべてのファンに読んでもらいたい300通」というタイトルで、10月24日に新人物往来社より発売されました。
今回は龍馬ファンから龍馬への手紙300通に加え、龍馬から姉・乙女に宛てた手紙10通を、手紙の写真・読み下し文・現代語訳・解説付きで掲載。また、龍馬を愛する各界の著名人から龍馬への手紙も掲載しました。その顔ぶれは、元台湾総統・李登輝さん、ソフトバンク社長・孫正義さん、「龍馬の手紙を讀む朗読コンサート」の乙女役でおなじみの小林綾子さん、大河ドラマ「龍馬伝」で龍馬の初恋の人・平井加尾を演じた広末涼子さん、その「龍馬伝」に、龍馬ファンという理由で出演されたビビる大木さん。他にも、ミュージシャンや、幕末の偉人たちのご子孫などから寄せられた龍馬への手紙を掲載しています。
龍馬関連本は数多くありますが、「龍馬からの手紙」「龍馬ファンから龍馬への手紙」「著名人から龍馬への手紙」の3本立てという、これまでにない豪華な一冊となりました。この内容で価格は千円。龍馬記念館はもちろん、全国の書店でお求めいただけます。オススメの一冊です。 尾崎 由紀



「これから始まりぜよ」

親日感・一体感・緊張感・満足感



フィッシュ教育部長の司会で日米交流は活発に進んだ=ニューヨーク・ジャパンソサエティで

なぜ龍馬か！。龍馬記念館にとっても全員が初めての体験である。緊張と興奮の無我夢中の10日間、熱まだ覚めやらぬ間の婦国報告会と続いた。予定プログラムは終了と思った時、皆さんの顔に安堵感よりこれから先に寄せる期待感を感じていた。「これで終わりではない、始まりぜよ」そんな龍馬の声が確かに聞こえた。龍馬更なる発信である。

龍馬記念館開館20周年企画「風になった龍馬」時代は未来へ」。3年企画の総仕上げが10月の「アメリカフォーラム」であった。スタッフに一般の参加者の皆さんも加えて35人がハワイとニューヨークで4回のフォーラムと2校の学校訪問にチャレンジした。テーマは「今、

ある。坂本さん、勝家の高山みな子さん、ジョン万次郎研究家の北代淳二さん、それに大石すみれさん、宜保然樹さん、辻真由子さん、3人の高校生6人のパネラーが現代に龍馬の志をどう生かせばいいのか語った。会場が熱くなった。書道や音楽がさらに盛り上げた。「こんな大人と子どもが一緒にあって、現実の問題を語り合うフォーラムを待っていた。続けてほしい。そんな声に手ごたえを感じていた。

3日後いよいよニューヨークである。国連近くのジャパンソサエティの会場は伝統の場所である。ここでは、会をジャパンソサエティ教育部長のロバート・フィッシュさんが仕切った。快い緊張感に満ちていた。子孫の語りかけに続いての高校生同士のディスカッションはこの日の焦点となった。「平和の始まりと終わりの定義は？」「龍馬なら今の世界でどんな舵取りするだろう」。やり取りに拍手がわいた。そして日米の若者たちの悩み問題意識が同じであること、地球単位で物事を考え手を結び合うことが可能であることを確認した。

最後は、ダイヤモンド街のNPOジャネット会館。日本を脱藩してニューヨークへ明日のヒ

ントを探しに来ている人ばかりだから、会場は全員龍馬。龍馬になった満足感で時間を忘れた。ニューヨーク最後の夕食時、皆さん多弁になっていた。疲れているはずなのに目がきらきらしている。この龍馬フォーラムは終わりではなく、これから始まりだとそんな予感を感じていた。

前田 由紀枝

険しい言葉の壁 体験した震えるほどの緊張感

今回、私は記念館のPC機材の裏方担当としてこのアメリカフォーラムに参加した。PC機材の裏方担当など今までしたことがなく戸惑うことばかりで、出発前からてんやわんやの大騒ぎであった。アメリカでも、会場に着く度、緊張と不安、そしてやる気と期待感が複雑に入り交ざる感情が押し寄せ、自らを鼓舞しながらの作業だった。中でも苦労したものは、それは「言葉の壁」。ハワイコンベンションセンターでのフォーラムではまさにその壁に直撃した。

現地機材スタッフと連携しながら行う作業は冷や汗もので、知っている単語を繰り返して、これが正しい表現なのか考える暇もなく、とりあえず伝わりさえすればいいと、ひたすら「YES」、

「NO!」「Thank you so much!」そして、ジェスチャーを繰り返した。「この線とこの線をつなぎたい」「この映像をスクリーンに映したい」簡単な文章さえ、緊張と焦りの中では出てこない。今思えばあの意味不明な単語たちからよく私の言いたいことを汲み取っていただけなのだと、現地スタッフの方々には頭が下がる。

そして、第2部でスクリーンにライブ中継映像を流すためのアドバイスを、同行の報道記者Oさんにももらったが、「ビデオカメラを30分以上持つことは西本さんのような素人には難しい」と言われ、安直に考えていた私はショックを受けた。本番はすぐそこまで迫っている、もう、自分の力を信じてやるしかないと思えてきた。一点に意識を集中させ、全力を出し切った。今でもその時のことを思い返すと震えがくるほどである。フォーラム終了後、現地スタッフの1人に笑顔で「Good job」と言われ、肩の緊張がほぐれたのを感じている。アクシデン

西本 有里

「錨は知っている！」⑧

土佐の幕末維新

土佐歴史資料研究会 現代龍馬学会

小島 一男

前回までのあらすじ

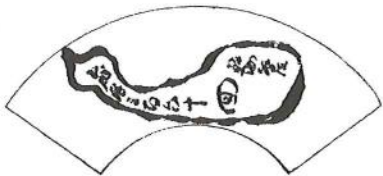
文久3年1月15日。伊豆下田の港に風を避けて2隻の船が停泊していた。山内容堂の乗る「大鵬丸」と勝海舟の乗る幕府の艦船「順動丸」であった。勝の元には脱藩した坂本龍馬がいる。脱藩の罪を許してもらった勝は、同月16日、容堂の待つ「宝福寺」に用意された酒宴の席に向かった。

容堂は上機嫌であった。勝が「大鵬丸」の船将らに喝を入れたからである。命からがらの目にあつた容堂にすれば、船将らの状況判断のまずさが招いた事態だと思っていたからだ。

「勝さんまあ一献と言いたいけど、酒は飲まないやらん。おまんの江戸っ子弁、ペランメエ調はどこへ行つたぜよ。待ちゆうけん」と容堂は土佐弁で迎える。勝は頭をさすりさすり「こりゃあ、御前にかかっちゃあ、この勝もかたなし、とても菌がたちやあしませんや」。勝も大笑い。座はいっぺんに和んだ。勝は雄弁にこれから上京する容堂のために、京都の最近の様子、若手公家、長州の動向など細かく語った。まるで、土佐藩の探索方のような報告調で話したり、手振り、身振りも入れて面白く話したり、容堂を喜ばせた。頃合を見計らっていたのだろ

真顔となった。そして「容堂公にこの勝海舟、折り入つてお願いの儀がございします」と切り出した。「我が軍艦操練所の門下生の中に、坂本龍馬と申す御前のお国の脱藩者があります。彼は大変優秀なる若者です。必ずやいづれお国のお役にたちましよう。どうぞ、容堂公のお力をもって脱藩罪の御赦免下さりますよう、伏してお願ひ申しあげます。勝は額を畳につけた。このことは、越前藩主であり幕府の政治総裁を務める松平春嶽からも頼まれていた容堂は、初めから腹は決まっていたが、そこは茶目っ気たっぷり

「勝さん、この盃をわしに返してくれたら、考えやってもええのう」と盃に酒をみたした。酒は呑めない勝と知っておおぶさけである。が、勝は「ハアハアありがたくちょうだいいたします」。呑めぬ酒を実にうまそうに呑み



容堂瓢筆の証

で見せた。「おつ、呑んだ！呑んだ！勝さんその一件この容堂、確かに引き受けたぜよ」。笑って容堂は勝の返杯を受けながらうなずいた。

勝は容堂公の胸のうちをこう理解した。「私はこの瓢筆のようなもので一年三百六十回酒を入れてる。酔っているからといって約束を守らぬことはない(鯨海酔候は容堂の別号)」

容堂は上機嫌であった。「勝さん、この容堂ついでお国言葉で話したが、許されよ。気を許した証じゃ。坂本龍馬以下、数名の者勝さんよしなに頼む。勝は恐れ入って席を辞した。

秋山久作は、この一部始終を見ていた。容堂が白扇を出した時、白扇に描かれた瓢筆を見て、はっ、とし、やっぱり、と思った。それは描かれた瓢筆があつた。「一心不乱にの信家」錨の櫃孔の瓢筆に違いなかったからだ。容堂は酔うと錨好きの久作に



(画) 和田 通博

「一心不乱にの信家」錨を見せその瓢筆を指差して「これは我が山内家、この容堂よ」というのが常であったからだ。龍馬はこの話を勝海舟から聞き、瓢筆の絵とその中に記された「歳酔三百六十回、鯨海酔候」龍馬の脱藩罪赦免の証を忘れることはなかったのだ。

で容堂が詩を吟じていた。久作がかねて用意の紙と筆を用意すると、容堂は揺れる船中で一気に筆を走らせ墨も乾かぬ詩を久作は賜つたという。

(次回に続く)

拜啓 龍馬 殿

225通

平成23年9月21日〜12月20日

太くて短い人生ですね。あなたのエピソードを聞くのが楽しみです。ユーモアがあって、茶目ッ気がある。人にとっても愛されたでしょう。おとめ姉さんにあてた手紙は最高です！
(9月22日 神奈川 M・T 40歳 女性)

書でも行動でもすごく尊敬したい人だと思いました。その理由を何点か紹介します。方法にとらわれず、人への配慮を施した書物が書ける。周りの批評にとらわれることなく、常識破りの大仕事を成し遂げられる(勇気がある)。日本内のことだけでなく、外国と日本、両方を照らし合わせた大仕事ができる。何よりたくさんの人に支えられ、惜しみない努力や国のための仕事に輝いている。俺自身もこんな大人になりたいし、こんな人が増えれば夜明けは近いと思います。
(9月25日 兵庫 I・I 10歳 男子)

初めてあなたを知ったのは小学生の頃だったかな。あなたの偉大さは、自分の成長と共に増して感じている。自分の年齢に近いと思います。
(9月26日 新潟 H・S 30歳 男性)

初めましてあなたを知ったのは小学生の頃だったかな。あなたの偉大さは、自分の成長と共に増して感じている。自分の年齢に近いと思います。
(9月26日 新潟 H・S 30歳 男性)

仕事の悩みを抱えつつ同僚2人とやってきました。窓からの景色を見たら悩んでいたことが小さいように思えました。直接的な解決ではありませんが、答えはここにあったように思います。悩んだらまた来ますね！
(10月6日 愛媛 K・T 29歳 女性)

念願がなつて龍馬殿の地を訪れることが出来ました。私が龍馬殿を知ったのは中学三年の時です。昭和36年頃です。ぜひどんなところを知りたいかと来ました。また私の人生に偉大な力を与えてくれました。私が読んだ本には「君がため 世のため何かおしからん 捨ててかある 命なりせば」を愛したとありました。それが私の心の支えでした。全ては人のために生きたいと思います。
(10月19日 宮城 K・O 64歳 男性)

今、あなたが見た海を見ながら書いています。初めての高知の海は広くてまぶしいですね。私のだんなさんも今から新しいことにチャレンジします。男には男の考えもあるでしょう。また成功したらこの海を見に来ますね。
(10月23日 岡山 H・K 32歳 女性)

龍馬さんと同じ目線で太平洋が見られるというので楽しみに楽しみにやってきましたが、

龍馬さんを初めて知ったのはかれこれ25年前。司馬遼太郎著の「龍馬がゆく」で、三人目を産んで子育てに追われている時に出会いました。日本史は勉強したし、グラバー邸にも修学旅行に行ったのに、龍馬さんは知りませんでした。私の龍馬好きが高じて、娘が去年二人目の孫の名前を「りょうま」と名付けてくれました。字は違いますが、りょうまに変わりはありません。娘よありがとう。孫のりょうまも龍馬さんみたいな人に育ってくれればいいな。
(9月28日 宮城 K・K 47歳 男性)

龍馬さんの見た海を、自分の目で一度見てみたいと思ひ、ひとり群馬から来ました。海なし県の群馬では感じられない大海原からのメッセージを全身で感じています。あなたがこの海を見て感じたこと、やろうと思ったこと、そして実行した日本を変えた偉業の数々。私も人として生まれながらには、自分のやるべきことを誠実にやっつけていこうと思ひました。また来ます！今度は家族と一緒に来ます。
(10月7日 群馬 K・Y 47歳 女性)

企業と企業を結びつけて大きな革命を興す！現代の坂本龍馬になる！
(10月8日 東京 S・O 19歳 男性)

ぼくはりょうまさんがとても大好きです。もしも本ものりょうまさんに会えたら、いっしょにけんどうのれんしゅうをしたいです。ぼくは、けんどうをしていますが、しあいにでたら一回せんでまけたけど、こんどのしあいはかつ気がしました。なぜかという(シエイクハンド龍馬像と握手をして)りょうまさんの力をかしてもらった気がしたからです。またこうちに行きます。
(11月13日 兵庫 S・I 7歳 男子)

あなたがこんなにもスゴイ方だと今回高知に来て知りました。私も今日からファンになりました。
(11月6日 兵庫 K・M 30歳 女性)

31年振りにここにやってきました。学生時代から龍馬にあこがれ、20歳の誕生日に原付バイクで龍馬の足跡をたどる旅に出た。昭和の龍馬参上とバイクに書いて、宮城の仙台から高知を経て、長崎まで行きました。たった20日あまりの旅でしたが、龍馬の気分になったものです。龍馬ブームもありましたが、あの頃のあこがれは歳をとった今でも色あせることはないですよ。龍馬は私の永遠のテーマなんです。
(11月1日 宮城 K・S 51歳 男性)

編集者より

拝啓龍馬殿の書籍第2弾が発売になりました！当館にも「いろんな人の龍馬へのメッセージを通じて、社会の動向や人々の想いが見えてきます。自分を振り返るきっかけになりました」など、感想が届いています。20年間にお寄せいただいた「拝啓龍馬殿」(総数14500通)は当館の図書コーナーでもお読みいただくことができます。来館者が龍馬に宛てたメッセージを読んで、他の来館者が元気や勇気をもらおう、うか。改めて手紙の持つパワーを実感しています。
尾崎 由紀

アメリカ訪問、龍馬一座

森 健志郎

35人で10日間の共同生活。結び目が「龍馬」だから初めて出会った者同士の違和感はない。とにかく皆さ思ひは熱く硬い。龍馬記念館が開館20周年を迎えて企画した「アメリカツアー」(10月8日、19日)のことである。スタッフと一般参加の皆さんとの境目はなかった。だから一座なのである。4回のフォーラムと2校の学校訪問がメインで、自由時間はほとんどなし。フォーラムでは席から身を乗り出し、聞き耳を立て、目を凝らし、拍手の手は痛いわかり。舞台上と観客席に分かれた「一座」の一体感は、帰国後も会う者同士の挨拶が「よかったねえ」で始まることからもうかがえる。年の暮れの1日、ツアーの添乗員だったU君が館に来ていつもの延長でUさん。「しかし、館長、あの旅ほどお楽しみの延長でUさん。「しかし、館長、あの旅ほどお客さんのバスポートを探し回った経験がありません」。フォーラムスタッフとしては申し分なかったのに、ツアー客としてはどうも添乗員泣かせだった一面もあったらしい。「結局は思い違いとかで事なきを得ましたけど、出発間際のバスポート探し、お金、携帯、たぬまはあつた。バスポートだけではない、お金、携帯、たぬまはあつた」という。中には帰国後「バスポートがなくなったのですが」と言って来られた参加者もいたらしい。今は笑い話でも、その時は顔色が変わっていた。

ここは館長の部屋

お風呂の洗面器、そう風呂桶持参という方もいた。なんでも以前の外国旅行の失敗から考えた知恵だと言う。風呂桶で身体を洗おうとしたところ、お湯をくみ出す風呂桶がなかった。たまたまそばにあったゴミ箱を風呂桶代わりにしたのだそう。それに懲りて自前の風呂桶持参となった。もともと、石鹸泡のついたバスタブには入りたくないのが彼女の主義。だからハワイでもお風呂に入り、ざぶざぶお湯を汲み出した。ところが排水機能が少ないからたちまちお湯が風呂桶からあふれ出し「おおごとじゃったぞね」と聞かされUさんも言葉も失ったという。ニューヨークのホテルは一流の「インターコンチネンタル」。さすが雰囲気は「ニューヨーク」。ベッドの寝心地のよさは枕を沈めると同時に睡魔に呼び込まれる感じである。熟睡とはこのことである。たった一つ難点があった。ベッドが高い。胸の辺りに来る。よじ登らねばならぬ。降りようとして足が届かず空(から)足踏んで転倒、足をくじいた慌て者のスタッフがいた。慌て者は私である。

テーマは「絆」

図柄にシエイクハンド龍馬像も

謹んで新年のごあいさつを申し上げます。

1枚が龍馬宛、他の5枚が龍馬アレンジの普通の葉書になっている「龍馬への年賀状」(6枚セット)を今年も無事実施することができました。私は第1回から事務局の立場で参加させていたに任じています。今年も全国の龍馬ファンから将来への決意や希望を託した年賀状が多数寄せられ、改めて坂本龍馬の目指した「志」が今、この時代にも求められていることを実感しました。

この企画は龍馬伝放映の前年、龍馬街道の吉富代表が熱意と企画書を手にも、当時何のつてもないまま坂本龍馬記念館の戸を叩いたのが始まりです。森館長と一発で意気投合、継続を条件に早速スタートの運びとなりました。変化を持たせるために年毎に図柄を変えねばなりません。図柄を考えるにはテーマが欠かせません。今年のテーマは「絆」でした。テーマから図柄が浮かんできました。坂本龍馬記念館は今年開館20周年を迎え、その記念に館の前へ「シエイクハンド龍馬像」を建てました。「絆」と「シエイクハンド」。考えるまでもないでしょう。図柄には従来の龍馬像とそしてシエイクハンド像、二通りを使いました。龍馬を通じて世界の人々が握手する。果てしなく膨らむ夢です。

全国から龍馬記念館宛に届いた年賀状は1月1日朝、まとめて桂浜の龍馬像前で龍馬に「伝達式」、その後、護国神社に奉納、さらに龍馬脱藩の日3月24日を経て龍馬記念館に昨年設置した「時の階段」に保管する段取りです。今回は3回目、現在第2回までのものが「時の階段」に納められています。開封は10年後です。楽しみます。菅



■「坂本龍馬記念館の20年を“海の見える・ぎやらしい”で振り返る！」



ポスターなど、一堂に並んだ会場風景

アートのな角度から

館の南詰め“海の見える・ぎやらしい”に立つと不思議な空気を感じる人が少なくないと思う。昨年末20周年を迎えた館の過去の企画展、イベントなどのポスターやチラシを一堂に集めてみた。身体を一回転させると館の20年が走馬灯のように回る。龍馬も、幕末の志士達も、時代もまた回る。昨年12月開催した「ポスターなどから振り返る坂本龍馬記念館の20年 at 海の見える・ぎやらしい」展である。

狙いは開館以来70を数える企画展毎に制作されたパンフレット・ポスター・チラシに限って展示することで、視覚的またアートの記念館の変遷を違った角度から見られるのではないかというわけ。実際、並べてみると、企画展への各担当者の思い入れが直に伝わってきた。

例えば、'06年11月～翌年3月まで開催された「坂本直行」展のポスターとチラシは“新緑の原野と日高山脈”“初冬の日高連峰”の2種類制作されている。雪の日高山脈を背景に新緑と初冬の茶色に枯れた原野。同じ風景である。長男登さんが“原野の絵かきは、絵・自然・山が好きだった”と父親を語っているように、その人物像が端的に表現されている。また、'07年12月～翌年3月まで開催された「幕末写真館」展では、2階全フロアを“写真館”に見立てて、“龍馬が切り撮る幕末の一瞬”と題し、写真を土佐和紙に引き延ばし特大パネルを作成“幕末”を展示した。市内の店舗やホテルにもポスターの掲示と置きチラシをお願いした。また、路面電車の車体にもポスターと写真を印刷、市中を幕末の志士たちが駆け巡った。

昨年10月のアメリカフォーラムでは、初めて英字のポスターを作った。ハワイとニューヨーク、ブルー主体のハワイ、赤のニューヨーク。古いものでは手書きのチラシもあったり、時代の変化が面白い。

展覧会は会期を前期・後期に分けて、20年間の軌跡を網羅している。企画展の趣旨する様々なイメージが、印刷物を通してどれだけ皆様に伝わってきたのかを、この機会に再びご覧いただき楽しんでいただければ幸いである。 中村 昌代

■11月開催 岩本和子「龍馬の見た海」展・スケッチに三度来館

圧倒的な迫力

11月は、記念館から見渡す雄大な太平洋を描いた、岩本和子さんの「龍馬の見た海」展を開催した。岩本さんは神奈川県茅ヶ崎市在住の画家で、インド、中国・シルクロードの取材を通し“祈りの空間”をテーマにする。その空間と龍馬の生きた世界に接点を感じ、油彩画「龍馬の見た海」を描くことを決意して、今回の展覧会となった。

展示作品は、14点の水彩画と、1点の油彩画。水彩画は、岩本さんが、油彩画「龍馬の見た海」の制作に先立って、その元となる土佐の海を何度か訪れてスケッチしたもので大きさは色紙サイズ。静かに打ち寄せる波や、行き交う船、陽の光を浴びて輝く海や、夕日に染まる海など、刻々と変化する穏やかで美しい土佐の海が淡い色合いで表現されている。それに対し、油彩画「龍馬の見た海」は100号の大作である。そのため展示場所や展示方法にも苦労した。

大きさや技法の違いはもちろんあるが、やわらかい色合いで、穏やかな海を描いた水彩画に対し、油彩画は、色合いも濃く深く、飛沫をあげて大きくうねる波がとても力強い。その一方で海面に黄色い陽の光が射しているようにも見え、動く波の力強さと陽の光の暖かさを感じる。海の色は、青系のほか、赤や黄、緑や黒などさまざまな色を使用している。それらを画布に塗り、乾かしてはまた色を重ねるといった作業を繰り返し、色に深みと厚みを持たせて、水彩画とはまた違う海を表現し、会場内で一際目を引き圧倒的な存在感を見せていた。来館されたお客様からも、『素晴らしい、まさに龍馬の海だ』、『あの絵は買えないのか』などの感想や問い合わせをいただいております、とても見ごたえのある展覧会となった。

なお、この100号の油彩画は、常設展示として展覧会後も館内に展示される。坂本龍馬記念館を訪れた際には、風景と作品、それぞれの「龍馬の見た海」をご覧ください。



圧倒的な迫力で存在感を放つ「龍馬の見た海」 小島 千穂

入館状況

2011年12月20日現在（開館以来7,299日）

- ◆総入館者数 3,137,316人
- ◆最多入館 (2010年5月2日) 6,686人
- ◆最少入館 (2004年10月20日、台風のため) 8人
- ◆2011年度最多入館(2011年5月4日) 5,502人
- ◆2011年度最少入館(2011年7月19日) 47人

編集後記

20周年の一区切りに向かって走り続けたこの3年間でした。振り返って飛騰を見ると改めてその思いが強くなります。「龍馬伝」で沸いた平成22年、後引く興奮の中、早春の北陸路に起きた東日本大震災、見渡せば国内外に湧き上がる不協和音に変化の時代到来を感じます。飛騰80号は新年、新時代へ決意のスタートです。まさに「平成龍馬の時代」を生きるヒントを発信できればと思いながら仕上げました。(モ)

館だより“飛騰”第80号(年4回発行)表紙題字:書家 沢田 明子氏

〒781-0262 高知市浦戸城山830
 発行日 2012(平成24)年1月1日 TEL(088)841-0001 FAX(088)841-0015
 発行 高知県立坂本龍馬記念館 http://www.ryoma-kinenkan.jp
 「飛騰」に対するご意見ご感想などお寄せください

開館時間 9:00~17:00 年中無休

入館料 一般500円・高校生以下無料

身体障害者手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者1名 高知県・高知市長寿手帳所持者は無料

館だより「飛騰」は、郵送料のみのご負担でお届けいたします。ご希望の方は、90円切手5枚をお送りください

私のテーマ

「ジャッドさんの子孫のこと」

万次郎から現代へと繋がる縁 北代淳二



思いがけない出会いだった。170年前、万次郎ら土佐の漂流民5人が世話になつたジャッド医師の子孫と、坂本龍馬記念館のハワイ・フォーラムで対面した。

万次郎とジャッド医師

1841年(天保12年)1月、万次郎は先輩漁師の筆之丞(のちに伝蔵と改名)、重助、五右衛門、寅右衛門と出漁中に嵐に遭い漂流。鳥島に流れ着いて餓死寸前のところを、運よく6月に米捕鯨船に救助された。捕鯨船はそのまま操業を続け、11月になってホノルルに入港した。ハワイは国際的にはまだサンドイッチ諸島と呼ばれ、カメハメハ王朝が統治していた時代である。

捕鯨船のホイットフィールド船長は上陸すると、5人の漂流民を友人のジャッド医師の所へ連れて行った。ホイットフィールド船長はどうかこの時、万次郎らが日本人かどうかまだ確信がもてなかったようだ。

そこでジャッド医師はかつて他の漂流民が残っていた日本のきせるや寛永通宝などを見せたり、手を合わせて拝む仕事をしたり、手振り身振りでお話ししながら万次郎たちの

反応を見て、5人は日本人だと確認した。この模様はのちに万次郎らの海外体験を聞き書きした河田小龍の『漂異紀畧』(1852年)の中に生き生きと描写されている。



6代目ローレル・フセインさん(左)と5代目メリー・ジャッドさん(右)=プナホウスクールで

パーメル・ジャッド Genit Parmele Lund (1803-1873) はニューヨークの医学校を卒業したあとキリスト教宣教師となり、24歳でホノルルに渡る。のちにカメハメハ3世の信頼を得て、実質的な首相役まで務めた初期ハワイ

史上の重要人物である。

ホイットフィールド船長から日本人漂流民を託されたジャッド医師は、万次郎が船長と共に去ったあとも、残された4人が異郷の地で無事に暮らせるように、住居や就職の世話をするなど親身になつて面倒を見た。

そのジャッド医師の子孫がハワイで健

在だと初めて聞いたのは7月24日、龍馬記念館アメリカフォーラムの打合せの席上。隣に座つたホノルル・プナホウスクールの日本語教師ピーターソンひろみさんの口からである。オバマ大統領の出身校として

有名なプナホウスクールは、幼稚園から高校までのすぐれた二貫教育で知られる全米屈指の私立校である。その歴史を調べてみて驚いた。創立は1841年5月。万次郎ら5人の漂流民が鳥島で必死のサバイバル生活を送っていた頃だ。なんとジャッド医師も創立者の一人だった。太平洋の米捕鯨が19世紀半ば迄に最盛期を迎えると共にハワイに来る米宣教師の数も増え、その子弟の教育のために作られたのがプナホウスクールの始まりだった。

10月11日、プナホウスクールで開かれたフォーラムで、ピーターソンひろみ先生がジャッド医師の2人の子孫を紹介してくれました。5代目のメリー・ジャッドさん(81)と6代目のローレル・フセインさん(58)。メリーさんはプナホウの元職員で、ローレルさんは現職の広報部長だ。

ハワイに残つた4人の中で伝蔵と五右衛門は10年後に万次郎と日本に帰国したが、重助はその前に病死、寅右衛門は現地の女性と結婚して帰国せず、その後の消息は不明である。

今回は時間がなかったが、ジャッド医師の子孫を手がかりにして、これまで殆ど知られていない万次郎の仲間たちのハワイでの暮らしに、新たな光が当てられるかもしれない。

繋がりには次の時代へ

「此のダッタジョージはもとメリケ人にして此の土に來たり、医を以て業となし」と『漂異紀畧』が記しているように、ジェリット、

人話題インタビュー

女優 小林綾子さん



語りかけてくる龍馬・いちばん好きなエヘンの手紙。「乙女が龍馬に宛てた手紙を読んでみたかった」

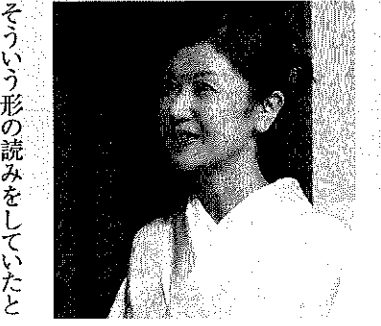
シンセサイザー奏者・西村直記さんの演奏曲に乗って女優・小林綾子さんが乙女やんになって龍馬からの手紙を読む「朗読・コンサート」がスタートしたのは3年前の11月15日(2009年)。公演は20回を越した。今回は西村さんに代わってピアノリストの福田明子さんと協演で高知駅前に設置されたNHK大河ドラマ「龍馬伝」で使用された坂本家セツトが舞台となった。迫力を増した土佐弁、演じる毎に乙女やんに近づくと小林綾子さんが「どのようないきさつで龍馬を見つめているのか伺った」。

元気者乙女への努力

「ここ数年の間に小林さんの演じる『乙女やん』に、俄然迫力が出てきましたね。」
小林 「ありがとうございます。そう言われるととても嬉しです(笑)」
「ではまず最初に、小林さんが坂本乙女という土佐の女性を演じる上で、どのような役作りをされたのか、そのあたりからお聞かせください。」

小林 「おとしの秋にやったときの朗読は、自分自身よく細部まで見えていなかった部分が多かったと思うんです。もちろん、龍馬が乙女さんに宛てた手紙というところで、いろんな想いがあって書いてるんだらうなあ、ということもわかるんですけど、なんせ昔の文体なので凄く難しいです。書いてあることが自分の体の中に入ってくるまでに、やはり時間が必要だったと思うんです。今日なんかは読んでくれてるような気持ちになりながら読んでいたんですけど、やはり回を重ねれば重ねるほど龍馬の想いが伝わってきますし、『ああ、ここでは龍馬はこういうことを思っていたんだな』と、最初わからなかったことがわかるようになってきましたね。」

性だったのか、どういう人物だったのかつかみきれなかったんです。『武家の乙女やん』というので、私自身も女性とやかなおしだ自分の中で解釈したんです。だから、そういう形の読みをしていたところがあつたんですが、読んでいくうちに『あ、違うんだな』というのがわかって、そこから『元気な乙女やん』という方に変わっていったところがありましたね(笑)」



小林 「そうですね、場所と言うよりも情景がしみません。窪川から西土佐村に行つたことがあって、雪がしんと降っている風景とか、愛媛県の河辺村では夜、屋外でやつたんですよ。河辺村は龍馬が脱藩するとき通つた道と言われている場所なんですけど、夜、たいまつをたいて、龍馬がそこを歩いているように、まっすぐいるような気配を感じるぐらい幻想的です。よく印象に残ってますね。」

小林 「あーそれウィキペディアでしょう(笑)。あれは、どこからそんな話が出たのか知らないんですけど、ある日何気なくウィキミタラ突然更新されてたんです。確かに本当に小さい子どものときは車酔いがひどかったんですよ。タクシーなんかにもすぐ酔っちゃったので全然乗れなかったんですけど、今は全然そんなことないですよ、もう今は車大好き(笑)」

小林 「それは観ている側の私たちにも、小林さんの変化がよくわかりますよ。小林さん、俄然目の迫力が違ってきました。舞台上でこられて手紙を読み始めると、『乙女やん、降臨』という感じになってきましたから。」

小林 「そうですね(笑)。実際に乙女やんやんが『土佐のはちきん』じゃないですけど、強い女性だつたんです。小林さんの3倍くらい大きい女性だつたんです(笑)」

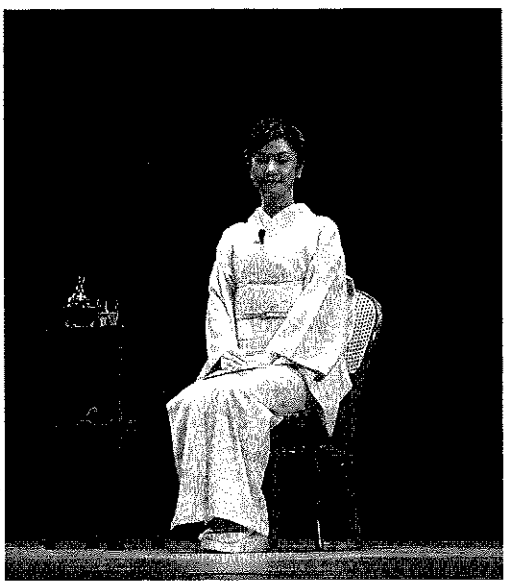
小林 「いや、私は東京の出身ではあるんですけど、小さい頃、母が山が好きで、よく山に登つて連れて行つてもらつてたんです。だから自然がとても好きなんです。私の住んでいる場所の近くには海がないので、高知はまあ海はすばらしくきれいですし、あつたかいですし、山は美しいですね。」

小林 「あーそれウィキペディアでしょう(笑)。あれは、どこからそんな話が出たのか知らないんですけど、ある日何気なくウィキミタラ突然更新されてたんです。確かに本当に小さい子どものときは車酔いがひどかったんですよ。タクシーなんかにもすぐ酔っちゃったので全然乗れなかったんですけど、今は全然そんなことないですよ、もう今は車大好き(笑)」

小林 「やっぱ『エヘンの手紙』ですね。『すこしエヘン』かおしてひそかにおり申候。……『猶王(エンヘン)』。この『エヘン』に『すこし』龍馬の特徴が現れていて、とても好きです。それから、お龍紹介の手紙も、『ああ、龍馬さん今ほんとお龍さんにぞこんなんだらうなあ』って感じますよ(笑)。新婚旅行の説明をしていて、まあいんなことにおいて龍馬さんって方はマエだつたらうなあと感じます。」

小林 「これから朗読コンサートを続けていける中で、小林さん自身さらに膨らませていきたい乙女像はありますか？」
小林 「そうですね。それにはもっと高知の女性というのを研究しないといけないんだらうなあと思うんですけど(笑)」

小林 「いや、乙女やんやんの土佐弁も、非常にネイティブに近い感じがしますよ。」



小林 「今この時代はほんとにネットでも電話でも、何でも情報が交換できる時代ですけれど、当時って一度ふるさとを離れてしまつたら、そう簡単には家に戻ってくることもできなかったでしょうし、ましてや脱藩してしまつたということであれば、もう戻つて来れないわけですよ。だから龍馬も相当の覚悟があつたと思うんですけど、姉さんには『政治』とかそういうのでもない部分の気持ちや打ち明けられる、乙女さんというお姉さんな感じがするの聞いてくれるお姉さんだつたんだと思うんですけど、だから龍馬にとっては『救い』とか『癒し』というか、なにか『言いたいこと心置きなく言い、話し合える相手』だつたんです。」

小林 「今この時代はほんとにネットでも電話でも、何でも情報が交換できる時代ですけれど、当時って一度ふるさとを離れてしまつたら、そう簡単には家に戻ってくることもできなかったでしょうし、ましてや脱藩してしまつたということであれば、もう戻つて来れないわけですよ。だから龍馬も相当の覚悟があつたと思うんですけど、姉さんには『政治』とかそういうのでもない部分の気持ちや打ち明けられる、乙女さんというお姉さんな感じがするの聞いてくれるお姉さんだつたんだと思うんですけど、だから龍馬にとっては『救い』とか『癒し』というか、なにか『言いたいこと心置きなく言い、話し合える相手』だつたんです。」

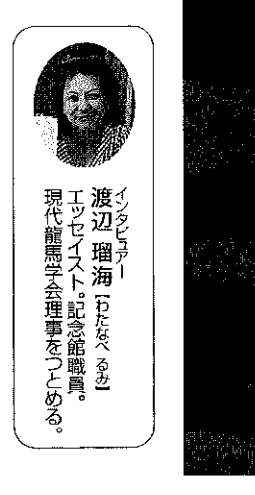


浪辺 瑠海(るみ)さん
エッセイスト、記念館職員、現代龍馬学会理事をつとめる。

小林綾子(こばやしあやこ) プロフィール
女優。東京都出身。1983年、朝の連続ドラマ「おしん」(NHKテレビ放送開始30周年記念作品)の子役で名演技を見せ、日本のみならず世界63カ国で放送された大ブレイク。以後、舞台や映画、ドラマ、バラエティ、ナレーター、朗読と多才活躍。池波正太郎原作の時代劇「刺客商売」では藤田まこと演じる秋山小兵衛の妻おはるを演じ大好評を得た。

小林 「今この時代はほんとにネットでも電話でも、何でも情報が交換できる時代ですけれど、当時って一度ふるさとを離れてしまつたら、そう簡単には家に戻ってくることもできなかったでしょうし、ましてや脱藩してしまつたということであれば、もう戻つて来れないわけですよ。だから龍馬も相当の覚悟があつたと思うんですけど、姉さんには『政治』とかそういうのでもない部分の気持ちや打ち明けられる、乙女さんというお姉さんな感じがするの聞いてくれるお姉さんだつたんだと思うんですけど、だから龍馬にとっては『救い』とか『癒し』というか、なにか『言いたいこと心置きなく言い、話し合える相手』だつたんです。」

小林 「今この時代はほんとにネットでも電話でも、何でも情報が交換できる時代ですけれど、当時って一度ふるさとを離れてしまつたら、そう簡単には家に戻ってくることもできなかったでしょうし、ましてや脱藩してしまつたということであれば、もう戻つて来れないわけですよ。だから龍馬も相当の覚悟があつたと思うんですけど、姉さんには『政治』とかそういうのでもない部分の気持ちや打ち明けられる、乙女さんというお姉さんな感じがするの聞いてくれるお姉さんだつたんだと思うんですけど、だから龍馬にとっては『救い』とか『癒し』というか、なにか『言いたいこと心置きなく言い、話し合える相手』だつたんです。」



浪辺 瑠海(るみ)さん
エッセイスト、記念館職員、現代龍馬学会理事をつとめる。

「ほれ話」 犬歩棒当記(八) 一 高松千鶴の便箋

京都国立博物館 宮川 禎一

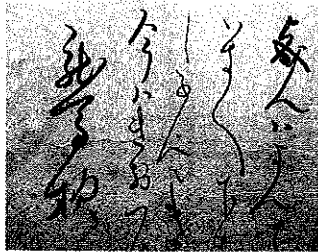
物事に気付くにはきつかけが必要だ。見ているようでじつは見えていない事柄がいかに多いことか。

ある日、筆者は京都国立博物館所蔵の坂本龍馬の手紙類の長い巻物を光に透かして見ていた。「ふむ、ここに虫喰いの痕があるぞ」とか「ああこの手紙は後から貼り継いでいるな」とか。

その時にあつと気付いたのだ。龍馬の姉高松千鶴が龍馬に出した手紙の便箋がうすすらした幾何学模様があることを。この手紙はおしゃれ便箋に書かれたものだったのである。

高松千鶴は龍馬の長姉。安田村の医師高松順蔵に嫁していた。のちに坂本家を継承していく高松太郎(坂本直)や習吉(坂本直寛)の母である。子供時代の龍馬が高松家へ度々遊びに行っていたことも龍馬の手紙(慶応元年九月九日)に見える。

この高松千鶴の確実な筆跡はわずかにこの通だけのようだ。安政三年の秋頃、第二次江戸修行中の龍馬を思いやって「灸をすえたか? お守りは届いたか?」



(写真) 千鶴姉さんの手紙の細部 (重文・京都国立博物館蔵)

装飾料紙の本場は京都である。このような上等な紙も高知城下で販売されていたのであろう。安田の高松家や実家の坂本家の裕福な暮らしぶりも想像されるのである。

いかにも女性らしい便箋への気配りである。

左の写真がうまく印刷されるのが心配だが:

コラム・龍馬のこと

「巡り巡って龍馬がNYへ」

NY在住 起業家
板越 ジョージ
(info@amedori.net)

気がつけばアメリカに渡って 24 年。日本ではいわゆる落ちこぼれのレッテルをはられ、高校を卒業後、日本を飛び出して「ビッグになる」と意気込んでアメリカに渡った。坂本龍馬との出会いは、その留学先で『龍馬がゆく』を読んだことだった。

私心を持たず自由人である龍馬に憧れを抱いた。アメリカの大学の寮には日本から送ってもらった龍馬のポスターを貼ったほどだった。私が出たのはサウスカロライナというアメリカ南部の田舎町。当時南部地区ではまだ人種差別があり、アジア人はオリエンタル人と言われ差別をされていた。白人というだけでなぜ偉いのか、アメリカ人に負けてたまるかと龍馬のポスターを眺めていた頃を懐かしく思い出す。

当初は国際政治の舞台に憧れ、大学を卒業後は外交機関に就職をしようと思っていた。しかし、このまま外交官を目指すよりもっと自由な世界を駆け巡りたいと思い、NYの出版社に就職。1年後、アメリカではアマゾンやヤフーが産声をあげ、いわゆるネットベンチャーの黎明期が始まった。その機運の中、私もNYで起業。事業は順調に行き、数億円の投資金を元手に史上最年少上場に王手をかけた。しかし、9・11 同時多発テロがとどめとなり会社を潰してしまった。奇しくも 33 歳で暗殺された龍馬と同年だった。

昨夏、高知に初めて足を踏み入れた。こんなに遠くから龍馬はアメリカに思いを馳せたのかと感慨にふける。その後私は約 10 年かけて復活した。気がつけばこの間、たくさんの人々に助けられた。そして、これからはNYで頑張る日本人を応援したいと思うようになった。NYには 10 万人近い日本人が滞在しているが、その日本人同士での交流は極めて希薄。当時、日本人の間では富裕な駐在員と現地へ渡った私のような日本人との間には差別的なものがあつた。NYにいる日本人が屈託なく助け合える場を作りたいと始めたのが NY 異業種交流会。昨年の9月でテロからちょうど 10 年目に 100 回を迎え、念願であつた NY 日本人会館 (JaNet 会館) を5番街に構えることができた。そんな折に、今回の龍馬NYイベントが

降って湧いてきた偶然に不思議な縁とタイミングを感じずにはいられない。願わくは、龍馬のような人材をここNYから輩出できるよう邁進したい。

“話してみるかよ”

脱藩の道歩く

坂本龍馬記念館 森本琢磨

昨年の九月に愛媛県大洲市で開かれた「わらじで歩こう坂本龍馬脱藩の道」に参加した。「河辺坂本龍馬脱藩の道保存会」が毎年開催しているイベントで、私は今回が初参加である。

土佐を脱藩した龍馬がその後通つたとされる山道を実際に歩くのだが、これがなかなかきつかった。当時は今のように整備もされていなかったであろうから、さらに苦労…いや、もはや命がけであったことは容易に想像できる。歩きながら「この木は龍馬を目撃していたかもしれない」「よくこんな道を一日で通つたものだ」と想いを馳せるのも、またこのイベントの楽しみである。途中、美しい自然や休憩コーナーでの地元の方々によるおもてなしに癒されながら、汗だくで 15km の道を踏破した。ゴール地点の泉ヶ峠に到着した瞬間、久々に「達成感」というものを感じたものであつた。

私が愛読している漫画に『お〜い竜馬』という作品がある。この中でいちばん好きな場面は脱藩のそれである。竜馬(この作品では「龍馬」ではなく「竜馬」と書く)が家族や友の顔を思い浮かべながらも道なき道を駆け、夜明けとともに振り返るとそこには土佐の山々。「さらばじゃ皆…。さらば土佐よ!」と心で叫び、再び前を向く。その時の竜馬の決意と志を少し感じられたかのような 15km であつた。

それにしても、休憩の時に振る舞われた「河辺ふるさとの宿」のトマトシャーベットの本当においしかった。商品化されないものだろうか…

高知県立坂本龍馬記念館
〒781-0262 高知市浦戸城山830

TEL(088)841-0001 FAX(088)841-0015
http://ryoma-kinenkan.jp